

2023年1月の総評に代えて 高橋修宏

さみしさの勝利！

伊勢海老越しの権太坂

(大橋 弘典 群馬県)

もしや「さみしさ」という感情が極まると、日常の風景さえデフォルメしてしまうのか。「伊勢海老」という目出たいものの向こうに眺めるのは、古い人名が付いた坂。どこか、北斎の浮世絵のような景色。

枯芝をトランペットの鳴る方へ

(長谷川柊香 宮城県)

子供らの声に起こされ雪明り

一句目、「トランペット」の金属的な音色と冬枯れの景色が、不思議と響きあう。遠くから「トランペット」の音色が聞えてくる。その音色の主を訪ねるように、ただ作者は「枯芝」を踏んで歩み寄っていく。二句目、まだ薄暗い早朝であるのに、「子供ら」は降りつもった雪に驚いているのか、すでに「子供ら」は元気に雪遊びでもしているのか。そのときの目覚めは、少しだけ気分も晴れやかかもしれない。

抱き合えば微かに花の匂い

(まぢりこ 埼玉県)

その花の名前を思い出せない

「思い出せない」とは、けっして忘却ではない。忘れまいとしながらも、人は知らず知らずに忘却に侵蝕されてゆくもの。それゆえ思い出そうとする振るまいこそ、か弱い人という存在のささやかな拠点であり、他者への架橋でありつづける。

もう何も言うことなく海のほう

(白野 新潟県)

ばかり見ていた 海ではなく

ある別れのシーンなのだろうか。おそらく作中主体が、そこで見ているのは、あてどな

い自分の心の内景。あるいは、なつかしくも切ない様々な過去の情景。

交点の数だけここにある嵐 (立花ばとん 東京都)

「交点」とは、じつに様々な場所にあるものだ。紙の上やパソコンの画面上はもちろん、道路などの日常の空間、さらには他者との出会いなども含まれるのかもしれない。その交点で、ときに無防備に晒されていく自分という存在。しかし「嵐」とは、ネガティブなものだけではないはずだ。

**花束を作るあなたの心には
水脈があり溶けゆく絵の具** (豊富 瑞歩 茨城県)

いろいろな花を束ねるとき、その人は色の重なりやバランスを、どこか意識しながら束ねていくものだろう。ひとつの花束にも、その人の美に対する想いや経験が投影されているのだ。そのような審美性を作者は、「水脈」という一つの言葉で表現した。

**誰しものが街の一部でありながら
誰を欠いても成立する街** (源楓香 北海道)

一行目から二行目への裏切るような飛躍が見事。「街」という存在の非情さや切なさを、そこに生きる一人の主体としてクールに、やわらかく言い止めている。

**最期の最期まで
言葉が足りない人だった** (ビスコ 愛知県)

「最期」のリフレインが、切なく響く。おそらく、その人はすでに亡くなったのかもしれないが、「言葉が足りない」がゆえに、残された者は様々な想い描けるものかもしれない。

小気味よく腹を叩いて
そこにいない子を愛おしむ
きみは母だよ

(青野陽 熊本県)

もしやして「きみ」は、流産してしまったのか。(ちゃんと生まれたのなら良かったけれど…) 一、二行目のきみの動作は、どこか哀しみや切なさが滲むけれども、三行目「きみは母だよ」の言葉は、限りなく優しい。

石塀に彼らが散っていくことを
桜と呼んだ天体が、ここ

(からすまゑ 神奈川県)

柿本多映の代表句のひとつに「天体や桜の瘤に咲くさくら」という作がある。だが、ここでは「彼ら」、「桜と呼んだ天体」と記されることで、「桜」という存在が名指される以前の世界に浮遊しているような気配をもつ。柿本句の本歌取りに見えながら、逆遠近法のような作品。

雪女上唇を舐め口火

(奎いう子 佐賀県)

「雪女」は冬の代表的な季語のひとつだが、この作のように「雪女」のディテールを仔細に描いた句は少ない。「雪女ちよつと^{すがめ}眇であつたといふ」(眞鍋呉夫)などは有名。この句では、「雪女」と「口火」のスパークが鮮烈で印象的。

雨漏りの溜まる花瓶

(吉沢 美香 宮城県)

神の旅

一行目から(空白をはさんで)二行目への飛躍には驚かされた。「神の旅」とは、どこか

季語の神無月も踏まえているのだろうか。一方、雨などの天象を「神の旅」と捉えれば、その「花瓶」は神の小さな休憩地なのかもしれない。

灰暗い駅舎に宿るるるの気 (マズルカ 山口県)

何よりも「宿る」の脚韻を活かして、「るるるの気」と表記したのが面白い。かつて赤塚不二夫の漫画に〈れれれのオジサン〉という呆けたキャラクターもあったが、「るるるの気」となると、ちょっと不気味か。

春祈るように子犬を買いました (玻璃 愛媛県)

新しい町に子猫の陽の在り処

どちらの作も小さな生命がモチーフになっているが、「春祈るように」も「陽の在り処」にしても、作者の対象への優しげな眼差しが心地良い。子犬も子猫も、ただ可愛いだけではなく、そのまま尊い存在であるのだから。

肉体はプラじゃない方のごみ箱 (真島しましま 千葉県)

まず、何よりも醒めたような眼差しを感じた。いずれ「肉体」さえもゴミになってしまうという身も蓋もない事実を、あえて作者は乾いたユーモアを添えて記した。

恐竜の化石見上げる旅始 (篠遠 早紀 東京都)

歩き疲れて

真夜中のクリスマスチキン

一句目、意外な組合せが、まず面白い。恐竜の化石を見つける旅であるなら、ぜひ、わた

しも行ってみたいものだ。また、二句目は行間の飛躍が、ちょっと切なく伝わってくる。きっと、その「クリスマスチキン」は忘れられない味になったはずだ。